おにぎり通信

2013年5月11日（土曜）　四ツ谷おにぎり仲間

こんにちは！私たちは毎週土曜日に、四ツ谷周辺と銀座・日比谷公園、東京駅周辺で生活されている方々を訪問しているボランティアグループです。

５月の第２日曜日は「母の日」です。「母の日」の始まりは、南北戦争時代のアメリカにありました。
南北戦争中にウェストバージニア州で、「母の仕事の日」（**Mother's Work Days**）と称して、敵味方関係なく負傷兵を助けるために地域の女性を集めて働いた、アン・ジャービスという女性がいました。
シャービスの死後2年経った1907年5月12日、その娘のアンナは、亡き母親を偲び、母が日曜学校の教師をしていた教会で記念会をもち、白いカーネーションを捧げました。
アンナの母への想いに感動した人々は、母をおぼえる日の大切さを認識し、翌年にはその教会にたくさんの人があつまって「母の日」を祝いました。これが「母の日」の始まりです。

☆<4月30日　福祉行動報告>　2名参加されました。

Ａさん（70代）、Ｂさん（60代）

お二人とも以前から体調を崩されていて、病院へ行きました。

次回の福祉行動：５月１３日（月）
　朝８時３０分までに東京駅丸の内北口の地下・喫煙所脇の車輪のところに集合です。
　病気やケガの治療を希望される方や、体を休めたい方と一緒に福祉事務所まで、ボランティアが同行いたします。福祉行動は原則として毎週月曜日に行います。
福祉行動は参加されるそれぞれの方が、ご自身の希望をご自身の言葉でハッキリと福祉事務所に伝えることにより成り立ちます。

最寄の福祉事務所
中央区福祉事務所・・・中央区築地　1-1-1　中央区役所4階
千代田区福祉事務所・・・千代田区九段南１－２－１　　3階

＜「働かざる者食うべからず」？＞

生活保護に関する批判を日々読んでいると、「働かざる者食うべからず」という言葉がキーワードになっているように思います。

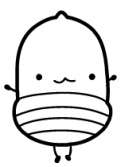
ある調査によれば、約７割の人が、「生活に困っている人は社会のせいで困っているのだから格差縮小への対策が必要だ」、と考えているそうです。なら、なぜ、格差縮小につながる生活保護への批判が高まるのでしょうか。この問題の背後には、日本人の労働観があるようです。

多くの人にとって、「生活に困っている人」のイメージは、「勤勉に働いているのに報われない人」です。つまり、勤勉に働いても必ず豊かになれるとは限らないから、その勤勉に報いるために「格差縮小への対策が必要」なのです。

裏返せば、勤勉に働いていない人への視線は非常に厳しくなります。働いていない人に対しては、それが「働かない」のか、諸事情で「働けない」のかに関わらず、「働かざるもの食うべからず」を適用し、福祉をはく奪しようとします。労働しない人が生活に困るのは自己責任、というわけです。

この論理では、労働と生存権がほぼ一体となっています。ちなみに、この論理をとりわけ好んだのは、「ナチス・ドイツ」と「スターリン」だそうで、ろくでもない発想であることは明白です。

生活保護問題を考える際に、「働かざる者食うべからず」の発想からは脱出して、人が人としての尊厳を守るための制度と捉えて議論したいと切に思います。



おにぎりを包んでいるラップや読み終わった通信は放置せずに、ゴミ箱に入れるなどして片付けにご協力をお願いいたします。
おにぎりはかならずその日のうちにお召し上がり下さい。
受け取るのは、１人１個でお願いいたします。

四ツ谷おにぎり仲間　連絡先：090-4959-0652（岩田）